

経済・金融 フラッシュ

10年10-12月期 資金循環統計

個人金融資産残高は3四半期連続の前年比マイナス

経済調査部門 シニアエコノミスト 上野 剛志

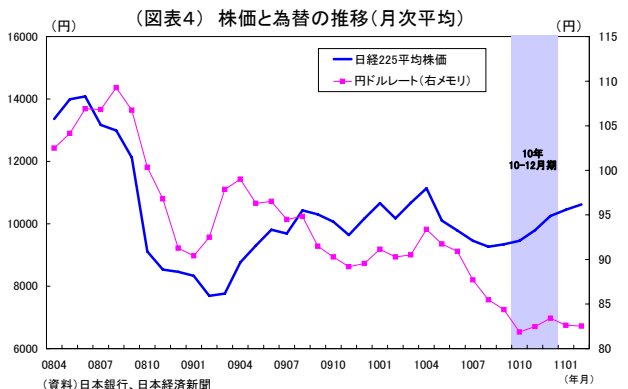
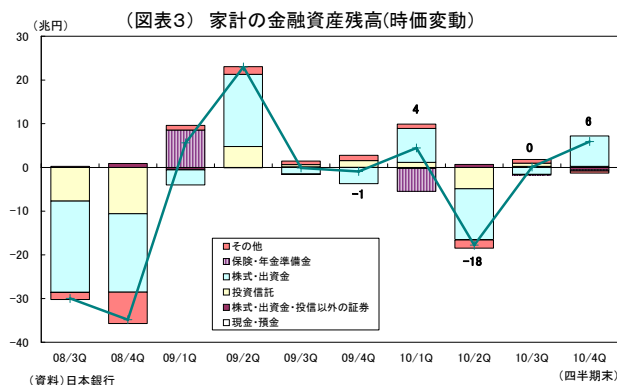
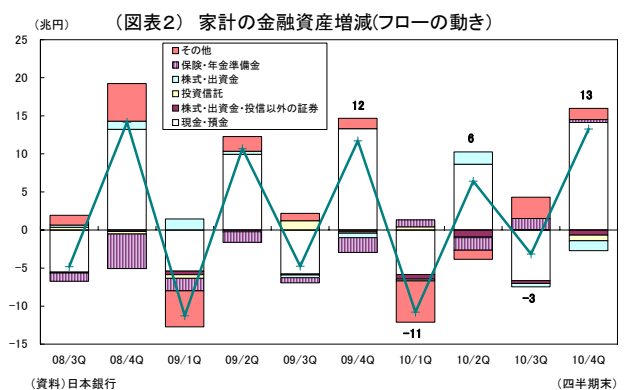
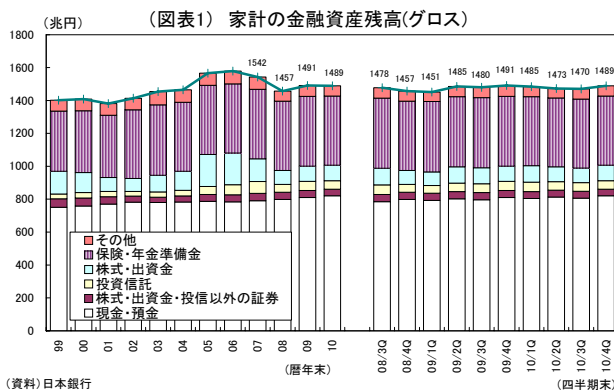
TEL:03-3512-1870 E-mail: tueno@nli-research.co.jp

1. 個人金融資産残高(2010年10-12月期末): 前期比では19兆円の増加

2010年12月末の個人金融資産残高は、9月末比19兆円増加し1489兆円となった。前期比での増加は4期ぶりとなる。10-12月期は賞与の最大支給月にあたる6、12月を含むことから例年フローで流入超過となる傾向があり、今回も13兆円の流出超過となった。業績改善などにより9月末に比べ株式市場が回復したことで時価変動の影響も6兆円のプラスとなった。

一方、前年比でみると2兆円の減少と、3四半期連続のマイナスとなった。一年間で6兆円の流入超過があったが、時価変動のマイナス影響▲7兆円がこれを上回った。前年末と比べ10円超の円高ドル安、株価(TOPIX)も▲1%下落したことが影響した(図表1~4)。

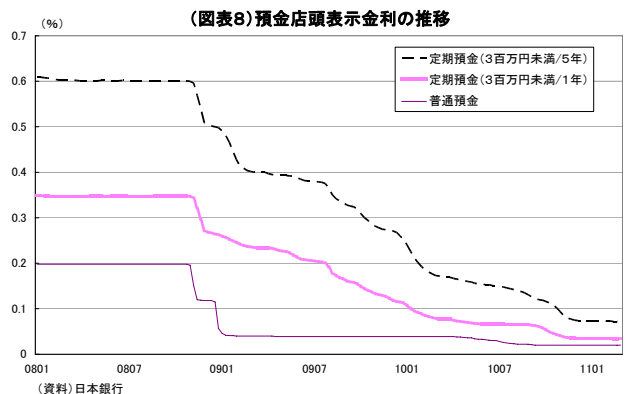
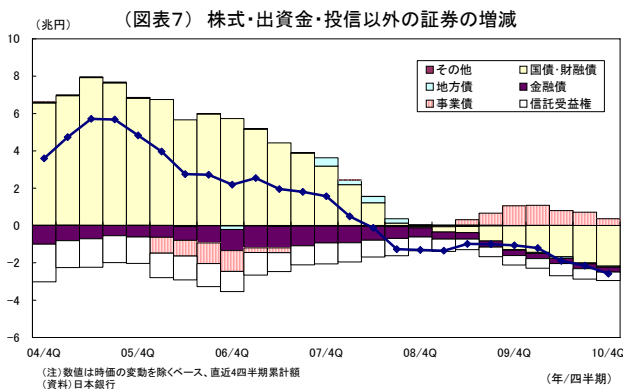
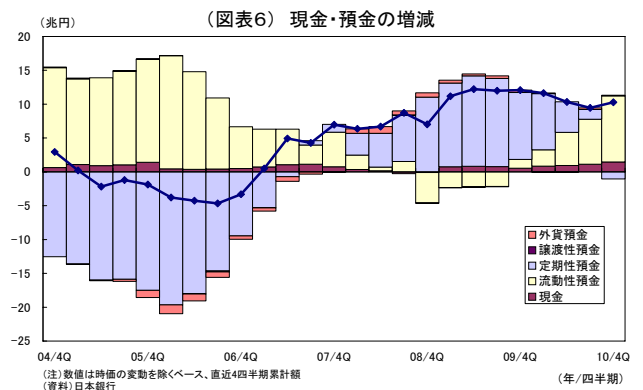
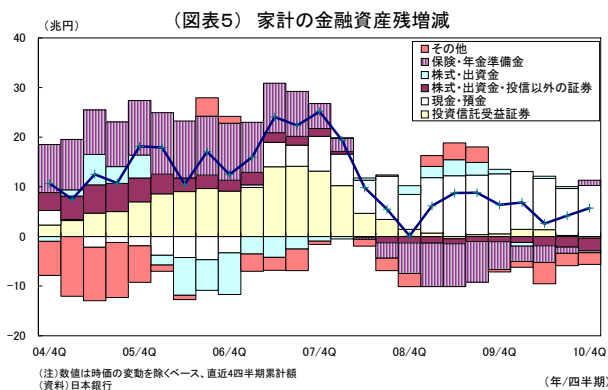
なお、足元は昨年末と比べ大きく株価が下落しているため、個人金融資産にもマイナスの影響が生じていると考えられる。



2. フロー(時価変動を除いた流出入額)の基調: 流動性預金への流入が進む

四半期ベースでフローの内訳を見るにあたり、季節要因を除くため、直近4四半期累計というやや長めの基調を捉えた動きをみると、08年以降、株式・出資金等からの資金流出が続くとともに、投資信託への資金流入も大きく減速し、金融資産への流入のほとんどを現預金が占めている状況が継続している。

現預金の内訳では、従来定期性預金への流入が大部分であったが、最近では定期性預金が流出に転じており、普通預金など流動性預金への流入がますます顕著になっているほか、現金への流入もみられる。金融緩和等の影響等による市場金利低下に伴って、定期預金と普通預金の金利があまり変わらなくなってきたことが背景にあるようだ(図表5~8)。

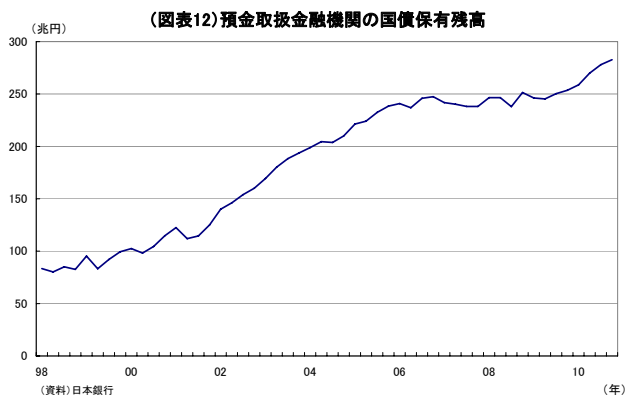
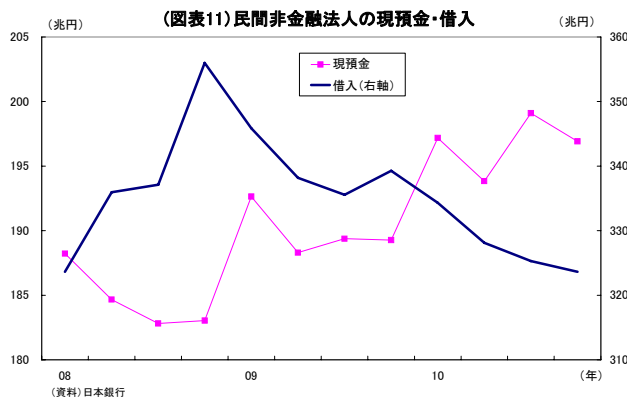
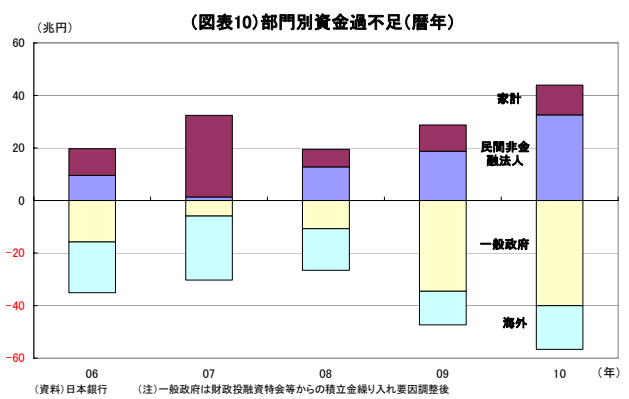
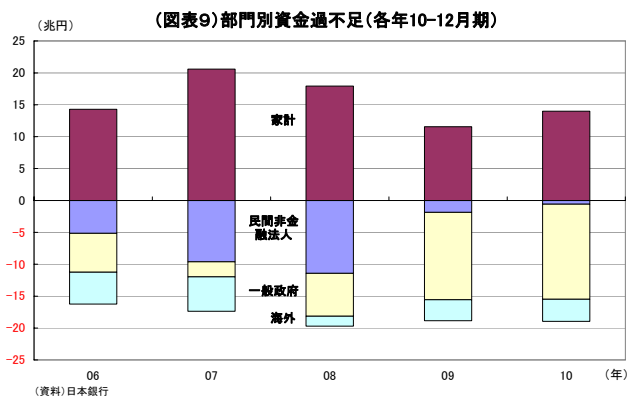


3. 部門別資金過不足：企業の資金余剰が政府の赤字を支える、金融機関の国債保有は過去最高に

主要部門別の10-12月期資金過不足の状況を見ると、一般政府の資金不足14.9兆円を家計部門の資金余剰14.0兆円が賄った。

暦年ベースでは、一般政府の資金不足が近年大幅に拡大しているが、これを民間部門、特に民間非金融法人の資金余剰拡大が賄っている。企業収益が改善した一方で、設備投資には慎重であったことを反映したものと考えられる。企業の資産・負債に着目しても、借入が減少傾向をたどっている一方、現預金は積み上がっている状況にある。

この民間部門の資金余剰が預金を通じて国債に向かった結果、預金取扱金融機関の国債保有残高は283兆円(前年比29兆円)と過去最高水準を記録している(図表9~12)。



(お願い) 本誌記載のデータは各種の情報源から入手・加工したものであり、その正確性と安全性を保証するものではありません。また、本誌は情報提供が目的であり、記載の意見や予測は、いかなる契約の締結や解約を勧誘するものではありません。